

→若狭路から修学院道をたどり赤山禅院へ

2021.3.14 (日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 564 回 参加報告



栖賢寺 石標

■赤山禅院に着いた

崇道神社の東隣に、兵庫県尼崎市内から越してきたという栖賢寺(せいけんじ)がある。ご本堂にお参りの後、約1万坪だというその広い園庭で三々五々、昼食をとって話を聞く。栖賢寺は、南北朝時代の康永年間、尼崎大物の地に臨済宗大徳寺派の寺院として、開山されたそう。

『絵本太閤記』によれば、本能寺の変の後、明智光秀勢の待ち伏せにあった秀吉が、僧形になって栖賢寺に身を隠し、難を逃れたのだという。この逸話が史実であるかどうかは不明だが、その縁からか、天下統一後の秀吉により寺領を寄進されたという。

お寺は近代に入り荒廃したが、実業家で数寄者であった山口玄洞氏の寄進により、臨済宗方広寺派の寺院として昭和7年、京都市左京区上高野の現在地に移転再建されたのだという。山口玄洞氏は大阪を中心に洋反物の商売で成功した人だが、多数の仏閣の復興に尽力した人物だ。他にも教育・社会事業・育英・慈善活動など、「無功德の精神」を発揮した人であり、寄進するにあたってその寺が、由緒正しい寺である事、悪人でも襟を正すような景勝の聖地にある事などを条件にしたという。いま脚光を浴びている渋沢栄一と通じる人物ではないかと思えた。

そんな玄洞氏ゆかりの栖賢寺を後にし、叡電叡山本線の踏切を渡って、少しばかり長く歩き、修学院離宮道から本日の眼目、赤山禅院についたのは、1時半頃。

赤山禅院は、パワースポットとしても有名な寺院ということで、コロナ禍でなかったら境内は人、人、人であったと思うが、数人が参拝していただけだった。

■夢枕獏『陰陽道・鳳凰の巻』の「泰山府君祭」を読む

横井先生が赤山禅院の参道で、この小説のあらましを話して下さった後、「この本貸しますので、今日の報告書を書いてくれます？ 短い話なのですぐに読めますよ」。

帰路、読み始めたが、私には難解であった。泰山府君などについて消化仕切れていないせいか、さっぱり腑に落ちない。

帰宅後、読み返し3度目を読み出すと、情景も心に浮かび、清明の人物像も分かり始めた。清明と源博雅との問答や、蘆屋道満とのやりとりに引き込まれ、「何と奇怪でおもしろい」小説との思いに至った。



赤山禅院

特に印象深いのは、最終ページの1ページ手前のライバル道満が清明に言う言葉「泰山府君殿は、おぬしの作った式(横井先生の解釈では「式神」のこと)をおぬしとして連れて行ったわ……」だ。

この本に遇わせて頂いたことに感謝であります。

(報告/石元英雄 3/19)